

安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なされて、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」
-マルコ 16章-

復活の喜び

罪の結果、死で終わるこの不可解な人生に生れ落ちてきた惨めな命に、「十字架の敗北」をもって死の壁を越えて復活の世界（永遠の命の世界）を示したキリストは、わたしたちを永遠の世界に連れ戻してくれる「人類の救い主」であることが今日、復活をもって知らされました。

それゆえ、復活祭の喜びは、「私の復活」の喜びとならなければならないのですが、このようにパンデミックの中、自粛を余儀なくされて祝う、復活祭儀の意味は、真剣に受け止められなければならないでしょう。ここ数十年来、温暖化と共に地球はあちこちで想定外の災害に見舞われ、他人事とみていた災難が今、世界を脅かして「私のパンデミック」となって、私たちの復活への道を曇らせているからです。神が沈黙してこの現実を許しておられる理由は明らかです。それは人類が生き方の結果を被る前に、ヨナの時代にニネベが滅びを免れたように、真の回心によって復活に至る恵みを与えようと待っておられるということです。

重要なことは、私たちが生き方を改めて生活の中に、経済ではなく神を取り戻すことです。神はご自身が造られた秩序の中に置かれた、復活に至る完成を人類に与えたいのです。この神の秩序を離れては、人類に破滅あるのみであることは、イスラエルの歴史が教訓として私たちに与えられているにもかかわらず、世界は今、まるで終戦を知らずに敵を恐れてジャングルの奥深く逃げ回っていた、かつての元日本兵の二の舞を生きているかのように「貧しさ」という敵を恐れて「豊かさ」というジャングルから出られないでいるのです。

貧しさを厭い、便利な豊かさに慣れ親しめば「キリストの味」は耐え難く、生涯ぬるま湯のジャングル風呂から抜け出せないでしょう。イエスに出会って従ったことで、やっと出口を見つけ、ジャングルからの脱出がかなった「洗礼」は、富と豊かさを目指して生きてきたこれまでの体を捨てて、真のキリスト者になるために新しい心で復活の世界を生き始める出発点です。

それゆえ、キリストの復活によって新しい世界を知った私たちは、「キリストこそ主」と仰いで、敵は、人の自我に住んで、人をコントロールしている悪霊であることを肝に銘じ、戦う相手は自分の自我であることを心得ましょう。そして聖アンブロジオがすすめるように、みんなマリアになって世に聖霊をもたらす人となるように、御子を育てた母であり、神の僕であるマリアの謙遜を目指すのです。その先にこそ、復活の喜びがあるからです。

